

賢いはたらき方のススメ ⌚

吉田 豪さん



プロレスラーからアイドル、テレビスターまで数えきれないほどのインタビューを行ってきた、プロインタビュアー、吉田豪さん。インタビューをあまり受けない有名人も、吉田さんなら受けると言わしめるほどに厚い信頼を寄せられている。「10代までは心を閉ざして世の中を斜めに見ていた」という吉田さんが、心の内を見せることが少ない有名人から言葉を引き出すために心掛けていること、ビジネスにも生かせる会話をつなぐコツやコミュニケーションを円滑にする工夫について伺った。

自分が生きていく方向を示すプロの肩書づくり

— “プロインタビュアー”という肩書は、吉田さんが作られたと聞いています。インタビューに特化したプロと名乗ることになったきっかけは？

吉田：編集プロダクションからプロレス専門雑誌に転職し、その後フリーランスになったときに、名刺を作りました。最初はプロフェッショナルレスリング（プロレス）をもじって、「**プロフェッショナルライティング吉田豪**」と記していたんです。

肩書にこだわっていなかったのですが、『Number』（文藝春秋）での仕事の際に「プロレス評論家」と書かれたときは、ちょっと頭を抱えましたね。プロレスを評論したことはないぞと。これはいけない、「**自分はこういう人間ですよ**」と打ち出したほうが良いなど。

では、何のライティングでプロフェッショナルと名乗れるかと考え始めました。この時に**インタビューと書評**、この2つのジャンルで生きていこうと決め、「**プロインタビュアー**」という肩書を名乗るようになったんです。

— 子供の頃から、人に話を聞くことが好きでしたか？

吉田：まったく反対で、子供の頃は世の中を斜めに見ていて、大人に心を開くもんか！と思っていました。

高校を卒業した後の**無職期間に始めたバイト**が、**変わるきっかけ**になったかな。最初は心を閉ざしていたんですが、バイト先の上司はユニークな経歴の持ち主で、アイドルのバックバンド、マネージャー、プロのバンドとしてデビューしたことがある人などがいました。ここには書けないような裏話などを教えてくれるなど、最高じゃないですか。どんどん話を聞くのが楽しくなって、**心を開いたほうが面白い**と思うようになりました。



編注：本インタビューはリモートで行われた

“インタビューはプロレス”。協同作業でいい試合を作り上げていく

— 吉田さんはよく「インタビューはプロレス」と例えていますね。そのココロは？

吉田：先日、元女子プロレスラーのブル中野さんのYouTube「ぶるちゃんねるBULLCHANNEL」に出演したときに、「どういうふうにインタビューをすれば面白い話を聞き出せますか」と質問されて、「**インタビューはプロレスみたいなもの**」と答えました。その一言で、ブル中野さんが謎が解けたという表情をしていて、この人はちゃんとわかってくれる人だと思いました。

インタビューは格闘技みたいにつぶしあいをするものだと思っている人が多くいますが、僕にとってはプロレスみたいな**エンターテインメント**であって、つまり観客を無視して一方的につぶすようなものじゃないんです。むしろ**協同作業**でいい試合を作り上げていくものだし、その上で試合中にどれだけ**緊張感を作れるか**なんですよ。

高田延彦さん率いるUWFインターナショナルでは、相手が気を抜いていたときにキックや関節技が入ったら試合が引っ繰り返って突然終わることもある裏ルールがあったらしくて。これが理想で、インタビューも「**気を抜いたら攻めるよ**」という空気をおわせて、緊張感を持たせるのがいいですね。

— インタビューのプロレスを行う上で、吉田さんは下調べを綿密に行いますね。絶対に抑えておく基本はありますか。



本棚からあふれかえるほどの書籍がある吉田豪さんの仕事場

吉田：そうですね。もともとデータを集めるのが好きなので下調べはしっかりやります。基本は**相手の著書を読む**こと。また、**他の人の著書に登場**しているなどが見つけられればインタビューの話題も広がります。ネットで収集できる情報はもちろん、**まる1日かけて調査**して、いかにしてインタビューでさりりと聞くかですね。過去のインタビューで疑問があれば、それも相手に投げかけます。

— 苦手な人をインタビューする場合はどのように臨みますか。

吉田：**嘘をつかないこと**をルールとしてインタビューしているので、「あなたのことが好きで、興味があって取材に来ました」というスタンスをとれるようにしています。話が膨らまなさそうだなと思ってオファーを断ることもたまにありますが、下調べをたっぷりしているうちに**興味を持てるポイント**がひとつは見つけられるものですし、そこから**話を広げられる**と思います。

— 下調べのデータが少ない時はどうされますか。

吉田：長くインタビューをしてきたので、データがなくても、経験値で**雑談からインタビューが成立**することも増えてきました。最近、YouTubeの街録chへの出演オファーを断り続けていたら、だったら代わりにインタビュアーとしてこちらの話を聞いて欲しいと言われて、本人のデータがほぼ何もないまま生い立ちから掘り下げたことがあったんですけど、それでもそれなりに**深い話は聞ける**んですよね。

リアクションを使い分けて正解の道を探すと、深い話まで掘り下げられる。

— 深い話まで掘り下げていくために気をつけていることはありますか。ここさえ押さえておけば相手の懐に飛び込んでいけるというポイントはあるですか？

吉田:重要なのは「いつもしている話はいらない」「あまり話したくない深い話が聞きたい」と言葉に出すことなく相手に伝えることです。つまり、相手が話したい話題の中で道が3通りほどあったら、こっちの**反応によって相手を誘導**していくんです。いつもの話になったら「ああ、それいい話ですよ」とか言って、違うルートを選ぶように持っていき、それが**面白い話**だったら**派手に笑ったり**驚いたりするなどリアクションをして誘導していくんですよ。これも、プロレスでわざと派手な音を出したりしながら、相手の技にやられた痛みを観客に伝えつつ盛り上げていくのと似ているなと勝手に思っています。プロレス自体は、お互いのお馴染みの技を披露し合って盛り上げていくものだけど、僕の場合は鈴木みのが相手の技をわざと避けたりするのも近いのかもしれないですね。**予定調和は拒否**しつつ、ちゃんと**試合を盛り上げていく**という。

話を掘り下げたら、バラエティ番組にしない、引き際の見極め方が大切。

— 吉田さんは、なかなか話がつながらない人、コミュニケーションをとるカギがつかめない相手に対してはカウンセラーの立場で臨むとよく話されていますが、具体的にはどのように話をつなげていきますか。

吉田:アイドルにその可能性が高いですね。バラエティ番組のように追い込んだり、突っ込んだりする必要はなく、**笑いを取る必要もない**ので、ひたすら受け止めて、心をときほぐして、じっくり時間があるので**焦らなくても大丈夫**ですと、対応します。

— どこまで聞いていいのだろうという見極めはどのようにしていますか。

吉田:まずは**表情を見て**、聞かれないのか、実は話したいのかを**探りながら**、少しずつ踏み込んでいきます。僕は人の悩みを聞くのが大好きなんです。以前に、シンガーソングライターの大森靖子さんに、「豪さんは**引き際の見極め方がうまい**」と言われたことがありますね。これは新鮮でした。

— 引き際の見極め方とは？

吉田:大森さん自身いろいろな人の悩みを聞く立場の人でありながら、ご自身も悩みを持っているんですが、もっと踏み込んで聞いてしまうらしいんです。**僕は深入りしない**ので、「豪さんはここで止まるんだな」と思ったらしいです。僕は聞くことは好きですが、深入りはしません。

— 仕事だけではなく、周りの友人の悩みなどを聞くことも多いのですか。

吉田:友人の離婚危機を何回止めたことか(笑)。**両方の話を聞きます**。友人が謝罪の文章をLINEで送ろうとしたときに、代わりに書き直したこともありますね。謝るときは**余計な事は言わない**でちゃんとしないとダメですよ。



吉田豪さんお馴染みのポーズ

賢いはたらしき方のススメ🕒

— 相手を不快にさせてしまったとき、悩んでいるときは、吉田さんならどのようにコミュニケーションをとりますか。

吉田: **信頼関係**があるから踏み込んで話を進めることができるというのが基本にあります。まずは関係性をしっかり作っていくこと。僕は、“**敵じゃないアピール**”を盛んにします。仕事の場合は、相手に関するグッズを持って行ったり、相手のことを知っていますから大丈夫ですよ、楽しく話をしていきましょうとアピールしていきます。

| わかったフリは厳禁、「わかります」の共感を効果的に使う

— 「相手に同化することも話を引き出すコツのひとつ」と著書で書かれていますが、どのようなことですか。

吉田: 「**わかります**」という言葉はどう**効果的に使う**かです。嘘をついてはダメです。考えが近いなと思う瞬間に打ち出す言葉が「わかります」という一言です。共感できると話が進みやすいので、いろいろ話をして**共感する部分**を探します。話がガチッとかみ合った瞬間は楽しいですね。

— かみ合った瞬間は盛り上がりますよね。

吉田: そうなんです。でもそれだけではなく、**突き放すパターン**もあります。「ぜんぜんわかりません」と言ってしまいます。そのほうが展開は面白くなる。**わかったフリをしない**ことが重要です。

— 嘘は絶対につかないということですね。

吉田: 嘘をついてもいいことは何もありません。嘘をつき続けることがどれだけ面倒なことかは若い頃に経験しているので、なるべく嘘のない人生にしようと思っています。特に**仕事では嘘は絶対にありえない**ですね。

| 年齢を問わず、適度に軽く見られて話を聞くニーズに対応する「現状維持」がモットー

— 吉田さんのモットーは「死ぬまで現状維持」とうかがっています。プロのインタビュアーとしてずっとやっていくということでしょうか。

吉田: ポジションとしての意味も含めてですね。以前、テレビ番組で林家パーさんが、他の出演者は野心を持ってキラキラガツガツしている中で、「**死ぬまでこの位置**」と言ったんですね。それがすごくいいなと思いました。ありがたいことに今僕の仕事は少しずつ上昇していますが。



— 仕事が増えつつも、野心を出し過ぎないということでしょうか。

吉田: 向いている仕事、楽しい仕事、刺激的なことしかしたくないのが本音です。話を聞く仕事は、どんな出版不況も乗り越えられるものだと思います。**話を聞くニーズ**はどこにでもありますから。あとは紙、ネット、イベントなど**出し方の違いに対応**していただくだけです。

賢いはたらき方のススメ ㊦

— 現状維持とは、話を聞くニーズに対応していくということなのですね。

吉田: そうです。そのためには、**適度に軽く見られながら**、年下の人でも普通に話を聞くことが成立できるようにやっていく。えらくなってしまうとやりづらくなる部分があるので、そういう意味でも現状維持がいいですね。

— 年下の人と年上の人では話すときに気をつけるポイントは違いますか。

吉田: そんなに変わらないと思います。大先輩は、情報が多いし、自分のことに興味を持ってくれる年下の人が好きですから、**大先輩のほうが話やすい**ですね。いろいろな人生の中のこの部分に興味があるから聞きに来ましたと踏み込めばいいんです。

— “興味があるから聞く”ことが大切なんですね。

吉田: もちろんです。コロナ禍でリモートでの配信も多くなりました。インタビューはやっぱり対面できるのが一番ではありますが、無観客でも、**配信の先の観客に喜んでもらえる**ことを聞いていく。疑問に思った部分を突破口にして踏み込む。とにかく**人の話を聞くのは面白い**ですよ。

取材後記

吉田豪さんのネット配信、猫舌SHOWROOM『豪の部屋』(<https://www.showroom-live.com/nekojita>)は、出演したいという逆オファーが多いのだそうです。その理由は、今回お会いして話をしていくなかで(リモートでしたが)、納得しました。初対面でも壁を作らず、話のなかで絶妙なタイミングに相槌を打ってくれるので、安心感が大きいんです。そして一つ一つのエピソードが面白い。もっと話を聞きたいと前のめりになってしまいます。経験値がすごいことはもちろんなのですが、データ主義というだけあり、考え方の引き出しが幅広いのだと思いました。今回は吉田さんが実践しているコミュニケーションに必要なポイントを聞きましたが、嘘はつかない、深入りしすぎない、相手が話したい話題を探る、時には緊張感のある話題をふるなどは、プライベートにも、仕事にも生かせるポイントです。リアクションも忘れずに、もっとコミュニケーションを楽しんでいきたいと思いました。

プロフィール

吉田豪さん

プロインタビュアー／プロ書評家

1970年、東京都出身。東京デザイナー学院、編集デザイン科卒業。編集プロダクション、プロレス・格闘技の専門雑誌『紙のプロレス』編集部を経てフリーランスに。徹底した下調べをもとにしたインタビューに定評があり、インタビュー相手についての知識は本人以上ともいわれるほど。インタビューを受けないとされる有名人も吉田豪さんならと受ける人が多い。著書に『男気万字固め』(エンターブレイン)、『人間コク宝』(コアマガジン)、『元アイドル!』(ワニマガジン社)、『豪さんのポッド 吉田豪のサブカル交遊録』(白夜書房)、『聞き出す力』(日本文芸社)など多数。テレビやラジオ出演、イベントでも活躍中。

